

報道関係各位

成人期AD/HD(18歳以上)当事者100名を対象とした調査/6都道府県11施設の発達障害者支援センターアンケート

成人期のAD/HD(18歳以上)当事者が最も望む支援は 「医療(医療機関・治療選択肢など)の充実」

～社会生活で困難を抱え、自尊心が低い可能性～

日本イーライリリー株式会社(本社:神戸市、社長:アルフォンゾ・G・ズルエッタ)は、日常・社会生活において、18歳以上の注意欠陥/多動性障害(以下、AD/HD)¹⁾当事者の現状や社会生活上の困難を明らかにすることを目的に、全国で18歳以上男女100名のAD/HD当事者を対象としたインターネット調査を実施致しました。同時に、AD/HD当事者やご家族の相談・支援を行っている6都道府県11施設の発達障害者支援センターへのアンケートも実施、成人期AD/HD(18歳以上)当事者(以下、当事者)を取り巻く現状が明らかとなりました。

AD/HDは小児期の障害であると考えられてきましたが、小児期のAD/HD当事者の30～70%は成人期(18歳以降)にまで症状が持続することが示唆されています²⁾。また、適切な治療や支援が受けられない場合、AD/HDが当事者の心身の健康や社会生活に深刻な影響を及ぼす可能性を示す報告もあります。日本イーライリリーでは、注意欠陥/多動性障害(AD/HD)治療剤「ストラテラ[®](一般名アトモキセチン塩酸塩)」について成人期のAD/HDへの適応症の追加承認申請中です。

主な調査結果は以下の通りです。

■63%の当事者は18歳以上で診断。約7割の当事者が「うつ病」など併存障害を抱える

アンケートの対象となった100名の成人期AD/HD当事者において、成人前に診断を受けたのは20%に過ぎず、当事者の63%は18歳以上でAD/HDと診断を受けており、初めて診断を受けた平均年齢は28歳でした【グラフ①】。多くみられる症状は、「忘れ物が多い」、「集中力がない」、「片付けができない」で、AD/HD特有の『不注意』による症状でした【グラフ②】。また、72%の当事者が併存障害を抱えており、最も多い疾患は「うつ病」でした【グラフ③】。

■頻繁な転職と低い収入、自尊心が低い可能性を示す

就労経験のある当事者のうち33%が「5回以上」転職を重ねていました【グラフ④】。また、約4割の当事者が収入を「100万円以下」と回答しました【グラフ⑤】。自分自身に対する気持ちについては、60%が「自分が好きだ」と思わず、62%は「(自分に)自信がある」とは思っていないことが判明し、自尊心が低い可能性が示唆されました【グラフ⑥】。

■成人期AD/HD当事者が、最も望むのは「医療(医療機関、治療選択肢など)の充実」

当事者自身が自分らしく暮らしていくために必要だと思われる支援として、72%が「医療(医療機関、治療選択肢など)の充実」と回答しました【グラフ⑦】。医療面で困難があると感じている当事者において、最も困っていることとして、「成人向け(18歳以上)のAD/HD治療薬がない」(41.9%)、「治療を受ける病院がない・診断できる先生がいない」(39.2%)があげられました【グラフ⑧】。

■発達障害者支援センターへの成人期AD/HD当事者からの相談が増加

発達障害者支援センターへの成人期当事者からの相談件数が近年増加しています【グラフ⑨】。成人AD/HD当事者からの相談で、医療面で最も多いのは「医療機関の紹介をして欲しい」【グラフ⑩】、就労面で最も多いのは「仕事が長続きしない」【グラフ⑪】となりました。また、発達障害者支援センターが当事者支援を行う上で、「紹介する医療機関がない、少ない」ことに最も困っている現状も明らかとなりました【グラフ⑫】。

■東京都立小児総合医療センター 顧問 市川 宏伸 先生 コメント

一般的に AD/HD は、成長に伴い多動性が目立たなくなるものの、同じミスを繰り返す、忘れ物が多いなどの不注意や、感情のコントロールが難しい衝動性などの症状は一部の患者において持続することがあり、良好な人間関係構築や就労などの社会生活において困難に直面している当事者が多数存在しています。AD/HD により生じる様々な支障を減らし、当事者がその人らしい生活をおくるためにも、成人 AD/HD 当事者への適切な治療が非常に大切です。

■北海道大学大学院教育学研究院附属子ども発達臨床研究センター 教授 田中康雄 先生 コメント

適切な診断・治療が提供されないなかで、それぞれが生きづらさを感じながら日々を送っていることがわかります。そのうえで、収入が少なく、仕事が継続しにくい実情も明らかとなり、結果的に約 6 割の当事者の方々の自尊心が低下していることが、調査から判明しました。当事者の方々が少しでも豊かな日々を送るためにも、すべての年代の方への適切な医療的関与と途切れない支援こそが、もっとも求められています。

■NPO法人えじそんくらぶ 代表 高山 恵子さん コメント

AD/HD の障害の最大の課題は自尊心の低下とされていますが、今回調査対象になった成人の AD/HD の方の QOL の低さ、特に自尊心の低さから、日本における成人 AD/HD の理解と具体的な支援が貧弱であることが推察されます。多くの当事者は AD/HD の特性から人間関係をうまく築くことが出来ず、周囲から孤立するなど日常・社会生活に支障をきたしています。ひらめき、行動力な AD/HD の特性を活かすことが可能になるように今後、成人 AD/HD 当事者に対しても家族や職場、大学での理解と適切な支援が広がることを期待しています。

以上

¹⁾AD/HD (Attention Deficit/Hyperactivity Disorder: 注意欠陥/多動性障害) : 不注意・多動性・衝動性を特徴とする発達障害のひとつ。米国では学童の 3~7%に AD/HD が存在すると示されており、日本では 2002 年に文部科学省が小中学校の教師を対象に³⁾ 行った調査では、2.5%(40 人学級で 1 クラスあたり 1 人)が不注意・多動性・衝動性といった行動上の問題を抱えているとされた。小児特有の障害だと思われがちであるが、AD/HD と診断された子どもの 30~70%は成人期(18 歳以降)にまで AD/HD 特有の症状が持続することが示唆されている。一般的に AD/HD の治療は、ソーシャルスキルトレーニングなどの行動療法と薬物治療を組み合わせで行う。AD/HD に対する認識は少しずつ進んでいるものの、特に成人 AD/HD に関する一般社会の正しい理解や適切な対応策は未だ十分に浸透していないのが現状。早期の気づき、周囲の理解や支援、専門医による適切な治療が重要で、そのためには AD/HD への正しい理解の促進が必要。詳しくは <http://www.ADHD.co.jp> をご参照下さい。

²⁾精神科治療学 19(5) : 563-569,2004.

³⁾医師による診断ではない

18歳以上のAD/HD 当事者対象調査概要

目的: 18歳以上のAD/HD当事者の実態・抱えている課題を明らかにするため

調査主体: 日本イーライリリー株式会社

監修: 東京都立小児総合医療センター 顧問 市川 宏伸 先生

北海道大学大学院教育学研究院附属子ども発達臨床研究センター 教授 田中 康雄 先生

NPO法人 えじそんくらぶ

調査地域: 全国

調査方法: インターネット調査

調査対象: 18歳以上、病院・医院などを受診し、AD/HDと診断された経験を持つ当事者 男女100名

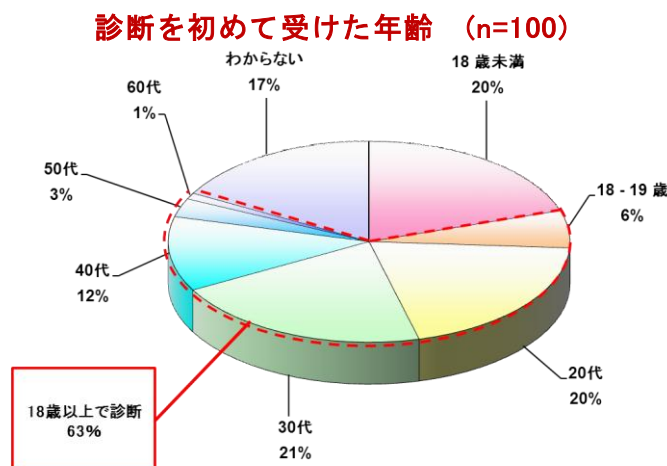
調査期間: 2011年7月15日～2011年7月28日

※調査結果は小数点以下第2位を四捨五入しました。

調査結果

グラフ① 診断を初めて受けた年齢は平均28歳。18歳以上で初めて診断された当事者が63%。

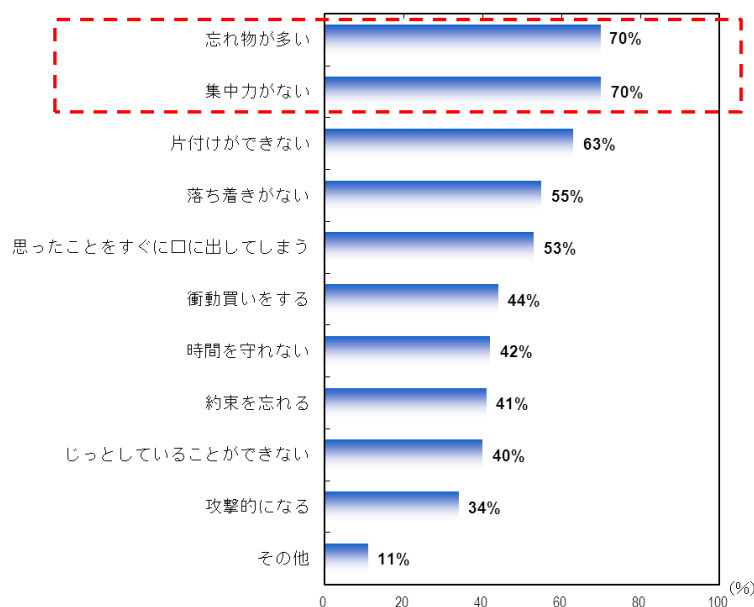
63%は18歳以上で初めて診断されていました。18歳以上のAD/HDの当事者が、診断を初めて受けた年齢の平均は27.88歳でした。



グラフ② 18歳以上のAD/HD当事者に多くみられる症状は、「忘れ物が多い」「集中力がない」。

18歳以上のAD/HD当事者に多くみられる症状は、「忘れ物が多い」70%、「集中力がない」70%、「片付けができない」63%と、上位3件は、AD/HD特有の『不注意』による症状でした。

18歳以上のAD/HD当事者に多くみられるAD/HDの症状 (複数回答) (n=100)

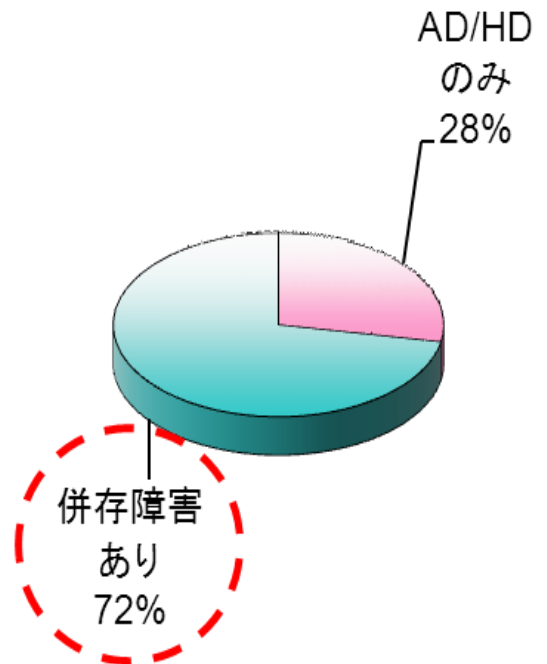


グラフ③ 併存障害がある割合は72%。最も多い併存障害は「うつ病」で半数が併存。

72%の18歳以上のAD/HD当事者が併存障害を持っており、最も多い併存障害は「うつ病」で、18歳以上のAD/HD当事者の50%が併存していました。

併存障害の割合 (n=100)

診断されている疾患 (複数回答) (n=100)

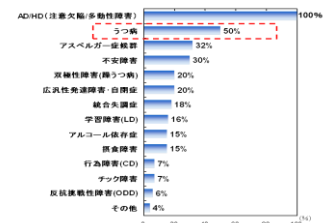


グラフ④ 就労経験のある当事者の33%は、「5回以上転職」を経験。

就労経験のあるAD/HD当事者の33%の転職回数は「5回以上」で、回答者の平均転職回数は3.19回でした。

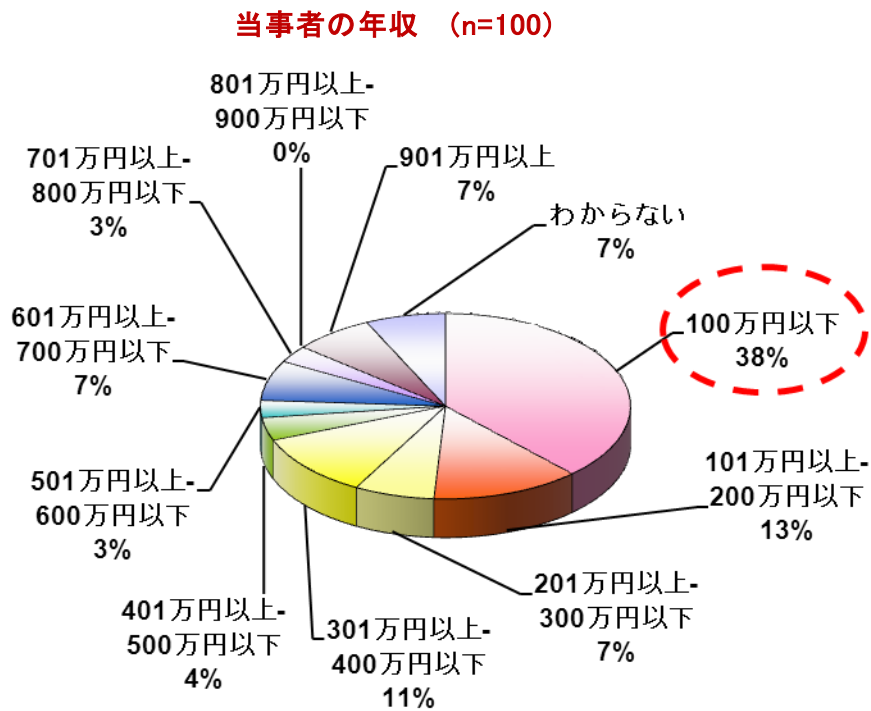
当事者（正社員・契約/派遣社員・自営業として就労経験のある対象者）の転職回数 (n=91:就労経験者)

平均転職回数 3.19回



グラフ⑤ 18歳以上AD/HD当事者の収入区分で最も多いのは、「100万円以下」

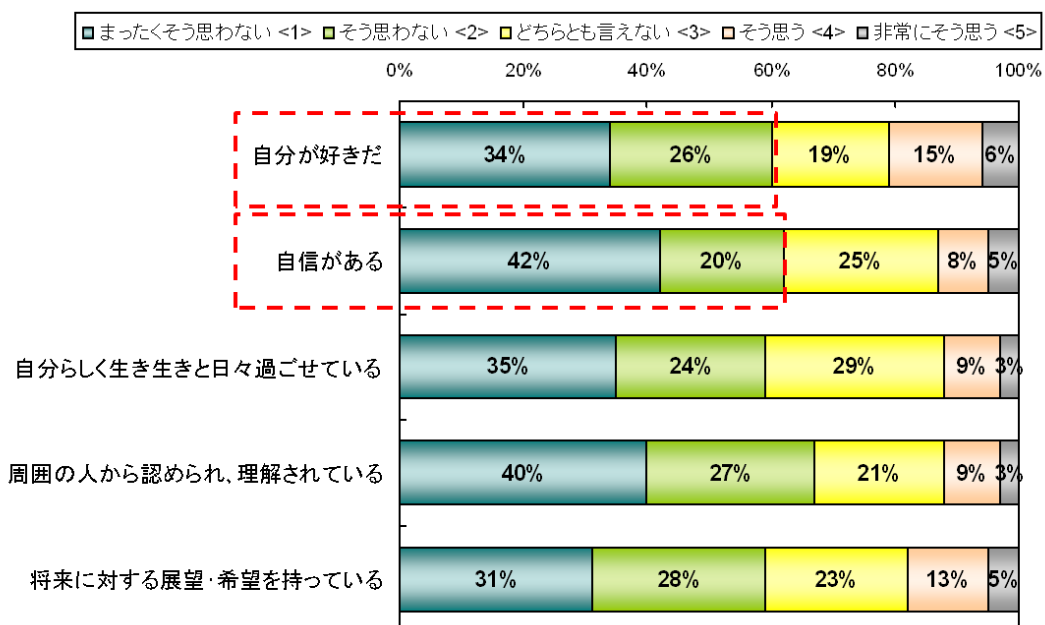
AD/HD当事者の収入区分で最も多いのは、「100万円以下」で、38%でした。



グラフ⑥ 18歳以上AD/HD当事者の約6割が、「自分が好きだ」と思わない。

18歳以上 AD/HD 当事者の60%が「自分が好きだ」と思わず(「まったく思わない」34%、「そう思わない」26%)、「(自分自身)に自信がある」と思わないと62% (「まったく思わない」42%、「そう思わない」20%)が回答し、自尊心が低い可能性が示されました。

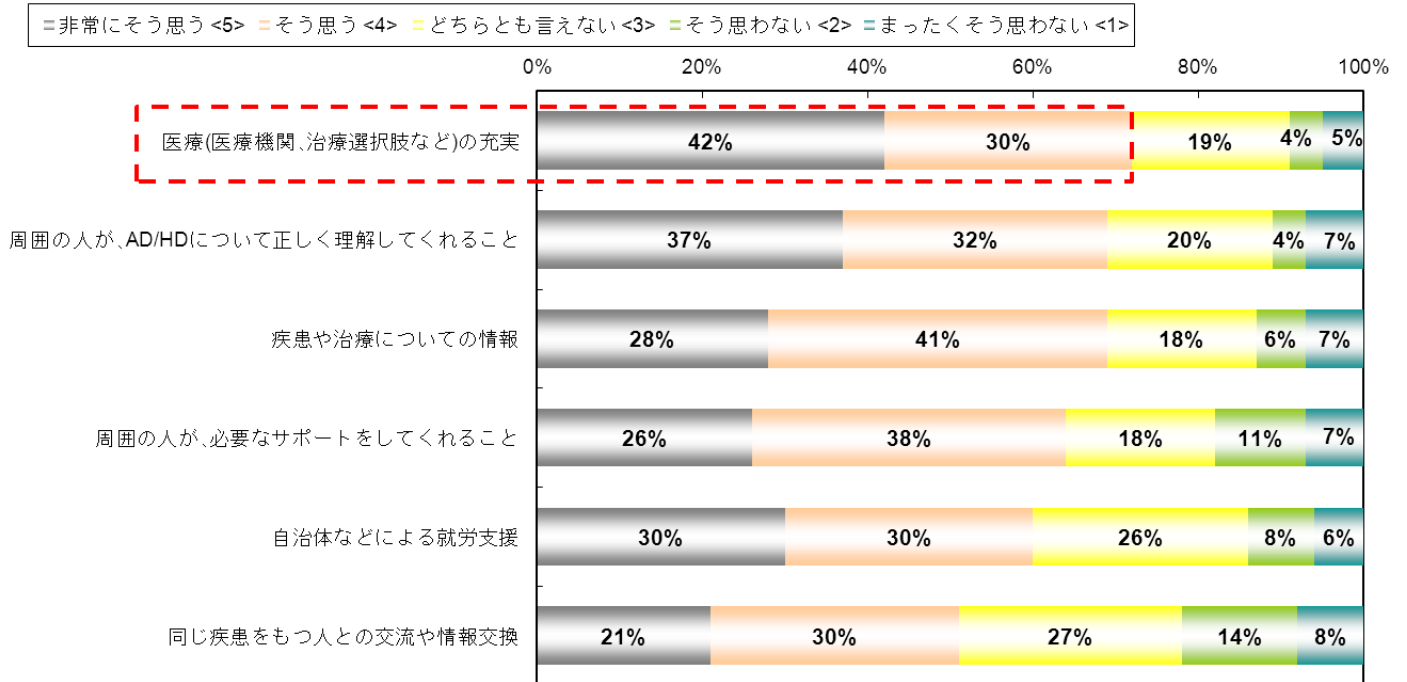
自分自身に対する気持ち・感情 (n=100)



グラフ⑦ 18歳以上AD/HD当事者が最も望むサポートは、「医療(医療機関、治療選択肢など)の充実」。

自分らしく暮らしていくために18歳以上AD/HD当事者が望んでいるサポートとして、72%が「医療(医療機関、治療選択肢など)の充実」に対して「非常にそう思う」「そう思う」と回答しました。

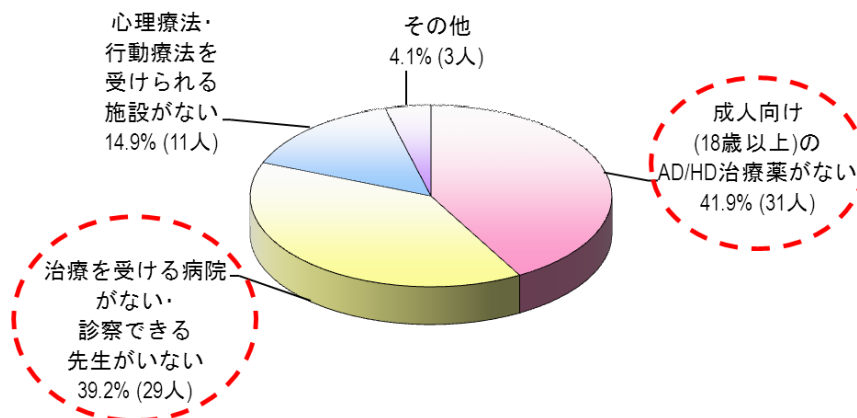
サポート体制 (n=100)



グラフ⑧ 「医療面」で最も困っていることは、「成人向け(18歳以上)のAD/HD治療薬がない」。

医療面において困っていることがある当事者のうち、41.9%が、「成人向け(18歳以上)のAD/HD治療薬がない」、39.2%が「治療を受ける病院がない・診察できる先生がいない」ことに困っていると回答しました。

医療面において最も困っていること (n=74:医療面について困っている当事者)



発達障害者支援センターアンケート実施概要

目的: 発達障害者支援センターでの対応状況についてアンケートを実施することで、AD/HD当事者・ご家族の日常生活・社会生活における困難や課題についてより良く理解させていただくため

調査主体: 日本イーライリリー株式会社

監修: 東京都立小児総合医療センター 顧問 市川 宏伸 先生

北海道大学大学院教育学研究院附属子ども発達臨床研究センター 教授 田中 康雄 先生

NPO法人 えじそんくらぶ

調査方法: 郵送にてアンケート票を送付

調査対象: 6都道府県(北海道、埼玉県、東京都、愛知県、大阪府、福岡県)の発達障害者支援センター 11 施設

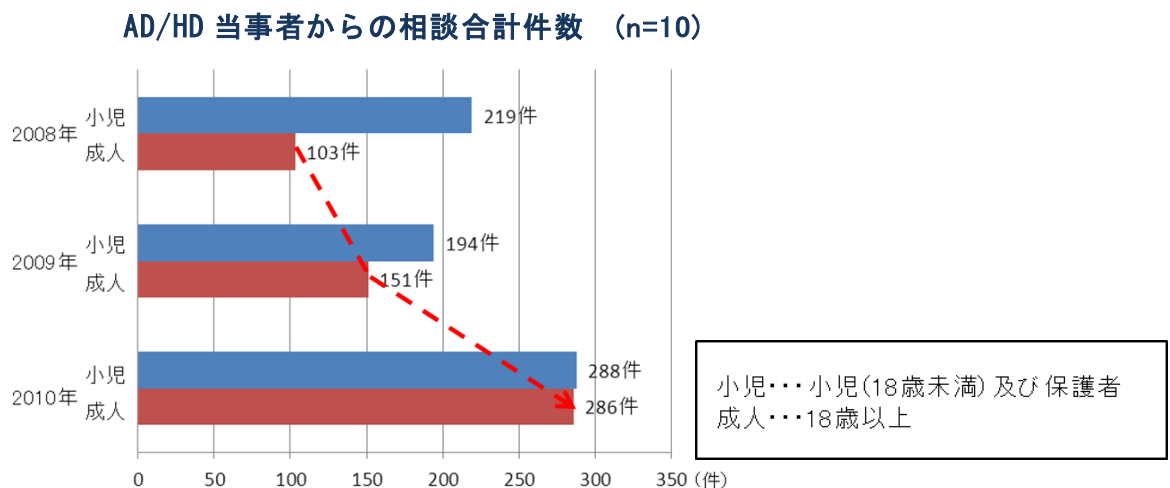
調査期間: 2011年7月25日(月)～8月18日(木)

※調査結果は小数点以下第2位を四捨五入しました。

調査結果

グラフ⑨ 成人AD/HD当事者からの相談は増加傾向にあり、2010年の相談件数は小児と成人がほぼ同数。

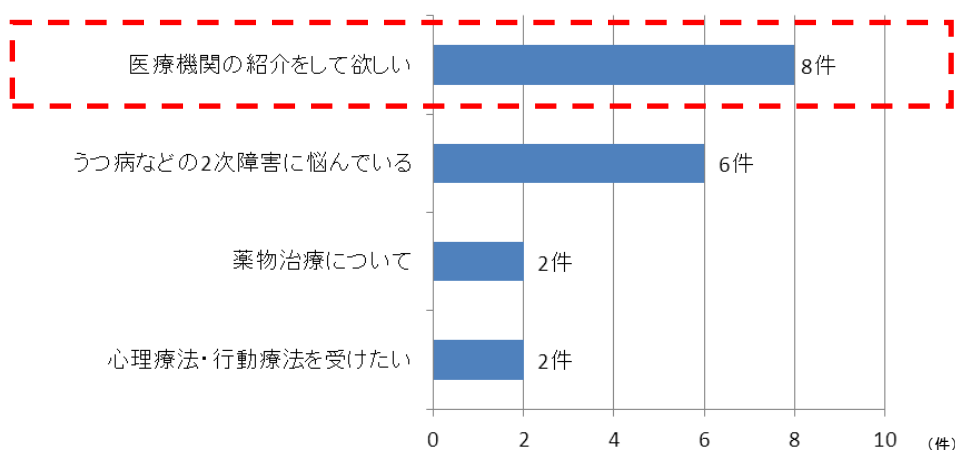
成人AD/HD当事者からの相談件数は、増加傾向にあり、2008年から2010年にかけて、約2.8倍に増えていました。



グラフ⑩ 医療面における最も多い相談は、医療機関の紹介希望。

成人AD/HD当事者からの医療面の相談で、最も多いものは「医療機関の紹介をして欲しい」でした。

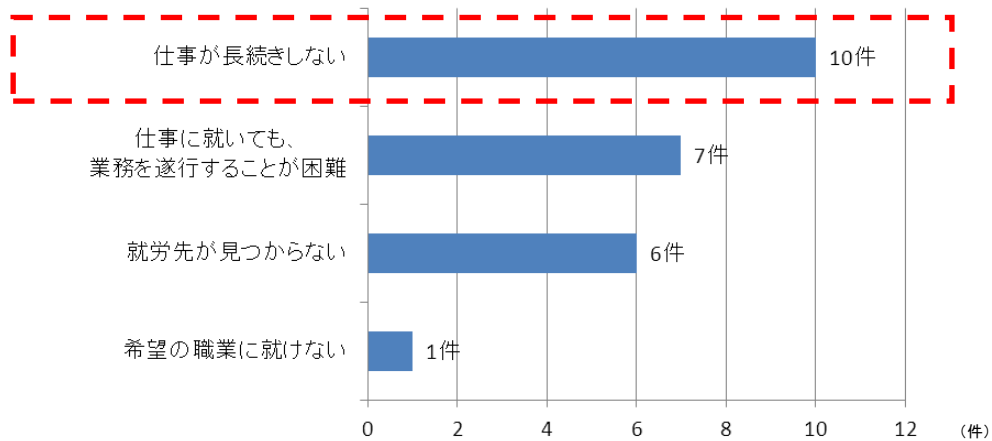
医療面において成人AD/HD当事者からの相談内容(複数回答) (n=11)



グラフ⑪ 就労面における最も多い相談は、「仕事が長続きしない」。

成人 AD/HD 当事者からの就労面の相談で、最も多いものは「仕事が長続きしない」でした。

就労面において成人 AD/HD 当事者からの相談内容（複数回答）（n=11）



グラフ⑫ 発達障害者支援センターが最も困っていることは、「紹介する医療機関がない、少ない」。

発達障害者支援センターが、AD/HD 当事者支援を行う上で最も困っていることは、「紹介する医療機関がない・少ない」でした。

AD/HD 当事者支援を行う上で、発達障害者支援センターが困る事（複数回答）（n=11）

